

楽園は どこにある ？

いま私たちは、対応しきれない情報の渦や様々な価値観にふれて生きている。不必要な情報ばかりに囲まれていると、不意に自分がどこにいるのか見失いそうになる瞬間がある。では「私たちはいまどこにいるのか？」と自問自答してみよう。「どこに」をどんなパラダイムと捉えるのかによって、自ずと回答は異なる。

現代の楽園はどこにあるのか？ 楽園=幸福を感じる時間や居場所、環境や状況と言い換えてもいいだろう。それは育った国、受けてきた教育、都市と農村、生活環境、ライフスタイルや人間関係、宗教や死生観、経験、現在の収入などによってまったく異なるだろう。だから、楽園などどこにもないが、どこにでもある、ということにもなる。

アフリカ、スイス、マレーシアなどいくつかの国を訪ねてみた。ここでは、こんな景色が広がり、こんな人々が生き、こんな時間が流れていた。すべてが同じ地球で同時に繰り広げられている営みである。

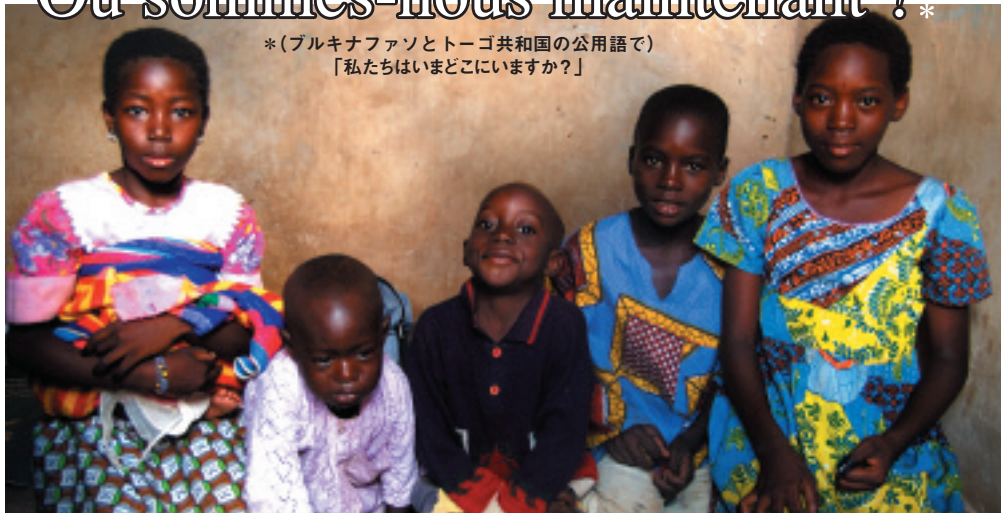
熱帯、砂漠、開発途上国、人口増加、エイズ、貧困、ODA…。私たちは、アフリカについていったいどれくらいのことを知っているのだろうか？ 市場には物があふれ、人々は休みなく働き続けている。それでも市民は貧しい生活を強いられている、ブルキナファソとトーゴ共和国を訪ね、市井の人々の声に耳を傾けてみた。

楽園 は どこにある 1

混沌のアフリカに 生きる未来を静かに見つける

Où sommes-nous maintenant ? *

*(ブルキナファソとトーゴ共和国の公用語で)
「私たちはいまどこにいますか？」



ブルキナファソ Burkina Faso

国名は「善良な民の土地」「清廉潔白な人の国」という意味を持つ。かつてフランスの植民地であったことから公用語はフランス語。主要産業は農業で、労働人口の90%が従事している。主要作物は、綿、トウモロコシ、粟、タロイモ。また牧畜も盛ん。1987年のクーデター後は世界銀行・国際通貨基金による支援が開始され、1991年からは構造調整政策も実施されている。

ブルキナファソ大使館
<http://www.embassy-avenue.jp/burkina/index-j.html>



コートジボワール共和国

トーゴ共和国 Republic of Togo

15世紀末よりポルトガルが渡来。以降、ドイツ、イギリス、フランスなどが統治国として支配。19世紀まで奴隷の供給地とされてきた、世界最貧国のうちのひとつ。公用語はフランス語。労働人口の約64%が農業に従事する農業国。主要作物は、イモ類、トウモロコシ、綿花。鉱物資源にリン鉱石、鉄鉱石がある。世界銀行・国際通貨基金と経済構造調整計画で合意。

外務省ホームページ トーゴ共和国
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/togo/index.html>



最新型ベンツが街を走り、海外の援助品は屋台で販売

アフリカの人々は、アフリカで起きていることをよく知っている。

紛争、飢饉、不法移民。そして世界の経済格差。ブルキナファソとトーゴ共和国の街で出会った人々の口から聞こえてきたのは嘆息声だ。

「去年はサトウキビの収穫がよかった。でもいくら稼いだって、全部、世界銀行の利子に吸い取られてしまう」

「いい車に乗っているのは、政治家とNGOだけ。外国人がいったい何を僕らに教えてくれると言うの？」

「学校を出たって、ありつける仕事はせいぜい兵役だけ。だからアフリカでは紛争ばかり」

その一方で、あるタクシー運転手は、バッテリーが上がった古いタクシーを直しながらこう言った。「盗むより、直すほうがずっといいだろ」。

「ブラック・サムライ。ワタシハ、ワタシハ、ワタシハ、黒人サムライデス」と日本語で歌う、コートジボワール出身の人気歌手アルファ・ブロンディの歌が街に流れる。

国境ではレストランの女主人が猿を11ユーロ(約1500円)で売り歩き、その横には客の食べ残しを狙う子どもたちが潜んでいる。

人々はおしゃれだ。街ではオートクチュールを扱う仕立屋が繁盛し、理髪店やヘアサロンが流行っている。インターネット・カフェでは詐欺師がメールを書くことに余念がない。欧州でも見かけなのが稀な最新型ベンツが優雅に道を滑り、市場では先進国から届いた援助品が屋台で平然と売られて

静かに見つける 瞳



クベラの市場で。クラスメートの少女とモナ(右)。モナは12歳。



モナのいとこのサリ。9歳。モナとサリは、祖母と一緒に暮らしている。



モナとサリのいとこたち。彼らの両親たちが出稼ぎに出ているので、親戚の家に世話になりながら、学校へ通っている。時々、近くの電話交換手にかかってくる両親からの電話が、親に甘えられる唯一の時だ。

いる。……このようにアフリカの日常的な光景は、混沌としながらも、活気に満ちあふれていた。

近隣国へ移民する人々、出稼ぎの両親を待つ子ども

ブルキナファソで出会ったモナとサリはいとこ同士。二人とも両親はコートジボワールに出稼ぎに行き、農地で働いているのだという。モナの両親は、モナが7歳のときに出国したので、もう5年も離れ離れだ。サリの両親は、3年前に家を出た。二人は祖母の元で暮らしている。彼女たちのほかのいとこたちも、似た状況にある。

いとこたちのお姉さん格で責任感の強いモナだが、両親の話になると、涙をポロポロ流した。

「会いたい、すごく」

実は多くのブルキナファソ人が、給料も仕事の量も格段に多い、西アフリカの大国コートジボワールに“移民”して働いている。すでに移民先で生まれたブルキナファソ人も少なくない。

ところが、これまでも不安定だったコートジボワールの情勢がさらに悪化した。2002年に起きた内乱が落ち着いたのも束の間、2004年には再び反乱軍と政府軍が戦火を交えたのだ。バクボ大統領の政敵で野党のワタラ元首相が、ブルキナファソ移民の息子と

いう理由で、多くのブルキナファソ人が母国へ追い払われた。コートジボワール生まれのブルキナファソ人たちも、見たこともない故郷に逃げ帰ることになった。

モナとサリの両親は、それでも手取りがましなコートジボワールの農地に張りついている。

「たくさんじゃないけど、私に仕送りをしてくれているの」

自分の生活費を稼ぐために危険な目に遭っているかもしれない両親を、モナは遠く離れたブルキナファソで気遣っている。

チャンスがあればまた出稼ぎに行きたい

電気も水道もない農村で暮らすブルーノは言った。

「ヨーロッパのピザを取れる方法があったら教えてくれ。雨季に入っても、前より雨がずっと少ないんだ。このままだと、乾季は絶望的だ。」

ここの生活は本当にきつい。去年は羊たちに収穫間際のピーマンを全部食べられた。息子は来年小学校へあがる。金がかかると。チャンスがあったら、また出稼ぎに行きたい」

一般に「マキ」と呼ばれるカフェを農村で営みながら農業を手伝うブルーノだが、客は同じ村の馴染みばかり。皆、ツケで飲んでいく。現金収入などすずめの涙だ。1カ月3万CFA

フラン(約7000円)稼いでいたコートジボワールの日々を懐かしく思い出す。

しかし、サッカーの話になると瞳が輝いた。「僕は少年たちのサッカーコーチをやっているんだ。僕も昔はサッカー選手だったんだよ。最後の試合で、PKをはずしたときは、地面に転がって泣いたっけ。」

僕の夢は、僕の教えている少年たちの中から一人でもいいから、いつかヨーロッパで活躍する選手が現れること。エー・ミたいにね」カメルーン出身のサッカー選手エトーは、現在スペインリーグの強豪チーム、バルセロナの中心選手として活躍している。

彼らの村の村長には妻が4人いて、彼女たちは子育てのほか、農作業や水汲みに日夜忙しい。「そりゃ、妻が4人いたら最高だね。でも、僕にはできないよ。お金がないから」そんなブルーノが今一番したいことは、兄に義足を作ってやることだという。

ブルーノのいとこのローランは、メディアを通して見る日本の印象を「人種差別の国だと聞いているよ」と言った。「なんであんなにアメリカに追隨しているのか?」とも。世界の情報を網羅するフランスの国営ラジオ局RFIが伝えるニュースを毎日聞いている彼らは、北朝鮮と日本の問題にも非常に関心を示していた。



編み物屋ファティマの娘。



編み物屋ファティマ(右)と近所の仲間たち。



女性が元気に働くミシン工房。手前の女性が経営者。

国の自立を唱える改革者は暗殺。やがて国際経済のしくみの中へ

トーゴ北部の都市カラでも、多くの人々に出会った。

ファティマは編み機で帽子を作り、露店で販売している。「マイクロクレジット(無担保小口融資)」(※1)により開業した。彼女がかぶっている帽子もお手製だ。

「値切ろうたって、そうはいかないわよ。二つ以上買わないと、まけないわよ」

バングラデシュの経済学者ムハマド・ユヌス氏(※2)が創設したグラミン(村落)銀行の手法は、ここでも自立したい女性たちに大人気だ。彼女は希望に満ちていた。

カラの市場では、少年たちが、ティッシュや石鹸、歯磨き粉、歯ブラシなど、生活雑貨をギッシリ詰めたダンボール箱を頭に載せて、売り歩いていた。

「オレはジダンだ!」

そう叫ぶなり、頭突きの実似をして周囲を笑わせる子もいた。貧困にあえぎながらも、彼らはたくましく生きている。

※1 経済学者ムハマド・ユヌスが、貧困の悪循環を断ち切るための手法として編み出した少額無担保融資。工芸や畜産、農産物の加工、小売業などの小さな事業を興すために必要な数ドル、数十ドルという少額の資金を、資産や土地などの担保を持たない人に貸し付けるという事業。発展途上国を中心に世界60カ国以上に広がっている。
※2 バングラデシュ南部のチッタゴン生まれ。チッタゴン大学を卒業後、フルブライト留学生としてアメリカにわたって経済博士号を取得。バングラデシュ独立2年後の1972年に帰国。1983年、バングラデシュの農村に、貧困層に無担保融資を行う「グラミン銀行」を設立。既存の経済学の論理をくつがえす革命的な事業が評価され、2006年ノーベル平和賞受賞。
※3 1983年にクーデターを執行し、大統領に就任。国民を養うための食料を生産するためには社会的公正が不可欠であると考え、教育改革による識字率の向上(4年間で識字率が12%から23%に上昇)や農民への土地の再分配など、多くの政治改革に取り組んだ。暗殺される週間前に国民に向かって述べた言葉「革命家自身は殺されることがあっても、その思想までも殺すことはできない」は有名。

トーゴ北部のカラ市場で生活雑貨を売り歩く少年たち。一番左の男の子は、町一番の靴職人。ちびっ子たちの自慢だそうだ。



トーマス・サンカラの墓。今でも命日の10月15日は多くの参拝者が訪れる。



日干し煉瓦でできたヤギ小屋の壁の穴から顔を出しているヤギ。



ブルーノ(左)。32歳。2児の父親。17歳から27歳まで、コートジボワールのレストランで働き、料理を覚えた。長兄を頼って出稼ぎに行ったが、癌で足を切断した2番目の兄に代わって、父親の面倒を見るために帰国した。ローラン(右)。30歳。ブルーノの従弟。ブルーノを頼って、コートジボワールに7年前に渡り、5年間暮らすも、バクボ政権の動乱に巻き込まれ、2年前に帰国。「ガーナ人や別の国籍のアフリカ人と歩いていても、路上の検問ではブルキナファソ人だけ金を巻き上げられた」と話してくれた。結婚したばかりで子どもはまだない。現在は農業を手伝う日々だ。